

# ちょうちよの やくそく 約束



あるところに、1本の大きなサクラの木が  
立っていました。でこぼこした枝々は上にも  
横にものびていて、それぞれの枝には葉が  
うっそうと生いしげり、その先には小さな  
かたいくきがのびていました。そして、その  
くきの先には、小さくて陽気なサクランボが  
なっていました。

でも、もしあなたがそばを  
飛んでいる鳥で、木を見たとしても、  
この木がサクランボの木だなんて、  
わからないでしょう。どうしてだと  
おもいますか？ それは、まだ  
サクランボがじゅくしていなかった  
からです。事実、実は全くの緑色  
でした！ じゅくしたサクランボは  
あざやかなこい赤ですが、この  
サクランボは、まだまだみじゅくな  
サクランボでした。育ち始めた  
ばかりで、ちっちゃくて緑色を  
していました。

この大きな木になっている、ある  
ちっちゃなサクランボを、ポウと  
よびましょう。ポウはあざやかな  
緑色のサクランボで、生えたての  
小さなくきの先にくっついて  
いました。ポウは、風にゆられ  
ながらほかの小さなサクランボの  
友だちと遊ぶのが大好きでした。





ある晴れた日、ポウは友だちを見て、びっくりしました。友だちが赤くなり始めていたからです。ポウの上ののびていた枝の友だちはみんな、かなり赤くなっていました。下の枝にいる友だちも、もうポウみたいな緑色ではありません。事実、みんな、じゅくしてみずみずしい明るい色のサクランボになりつつあるのです。

それなのに、ポウはまだ緑色です！そして、小さいのです！友だちみたいに赤くなり始めてさえいません。

「どうしたらいいんだろう？」ポウはさげびました。ポウは気が気ではありません。「もしかしたら、ぼくはみんなみたいな丸々とした赤いサクランボにはならないのかも。ずっとこのまま小さくて緑色のままかも！」そう言って、ポウはなげきました。



そこへきれいなちょうちよが飛んできて、ポウのいる枝にとまりました。ゆうがな青と黄色の羽をしています。

「こんにちは。」とちょうちよがあいさつしました。

「やあ。」ポウは悲しそうに答えました。

「どうしてそんなにふさぎこんでいるの？」とちょうちよがたずねました。

「あのね。友だちを見て。みんな、じゅくして赤くなってきてるでしょ。だけど、ぼくを見てよ！ まだかたくて緑色なんだ。もしかしたら、もうずっと、あざやかできれいな赤いサクランボにはなれないのかも。」

ちょうちょは ほほえんで、ゆうがな <sup>はね</sup>羽を ひらひらさせました。  
どうしたら この <sup>かな</sup>悲しげな <sup>ちい</sup>小さい サクランボを <sup>げんき</sup>元気づけられるか、  
知っていたのです。「ねえ。」と ちょうちょが <sup>い</sup>言いました。  
「心配することなんか、ないのよ。この <sup>き</sup>木には、まだ <sup>みどりいろ</sup>緑色の  
サクランボがたくさんあるのよ。」

「本当？」 <sup>ほんとう</sup>ポウは <sup>き</sup>聞き返しました。

「本当よ！」と ちょうちょが <sup>こた</sup>答えました。「わたし、この  
<sup>まわ</sup>木の <sup>ぜんぶ</sup>周りを <sup>と</sup>全部、<sup>まわ</sup>飛んで <sup>き</sup>回って来たんですもの。<sup>あか</sup>赤く  
なったサクランボもたくさんあるけど、まだ <sup>みどりいろ</sup>緑色のだって、  
たくさんあるのよ。だけどね、知ってるかしら？」

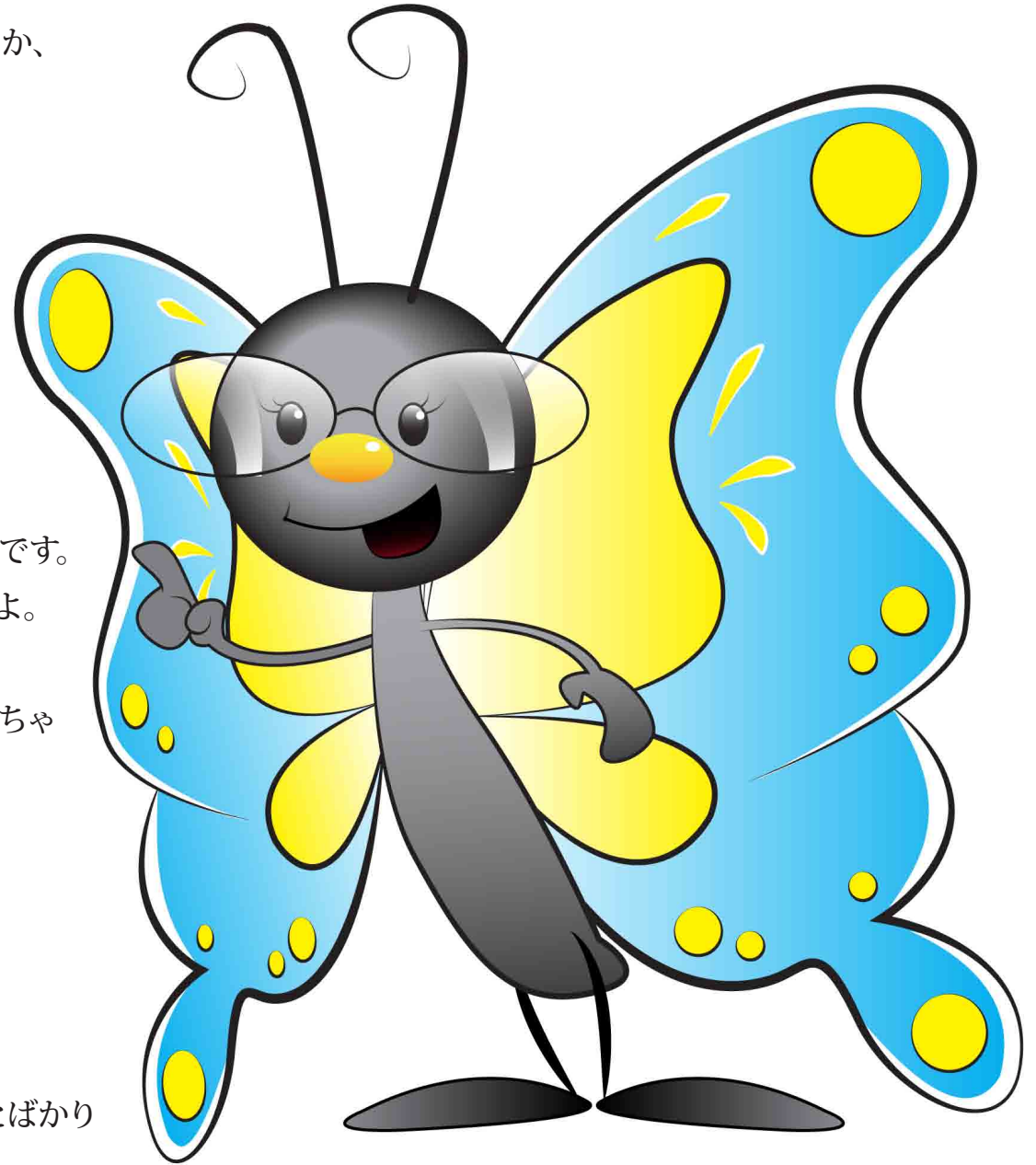
「何を？」 <sup>なに</sup>ポウが <sup>き</sup>聞きました。何だか <sup>なん</sup>希望が <sup>きぼう</sup>わいてきたようです。

「あなたはいつか、<sup>じぶん</sup>自分でも <sup>き</sup>気づかないうちに <sup>あか</sup>赤くなるわよ。  
ほかのみんなみたいにね。とても <sup>おお</sup>大きくなって、じゅくした  
きれいなサクランボになるわ。ただ、ちょっと <sup>おお</sup>しんぼうしくちゃ  
いけないだけなのよ！」

「しんぼうするって？」 <sup>がえ</sup>ポウが <sup>き</sup>オウム返しに <sup>き</sup>聞きました。

「それって、どういうことなの？」

「あのね。」と ちょうちょが <sup>い</sup>言いました。「しんぼうするとは、  
<sup>ま</sup>待つことなの。すご〜く <sup>とき</sup>ほしいものがある <sup>とき</sup>時には、すぐに  
ほしいって <sup>おも</sup>思うでしょ。でも、そうはいかないわよね。だから  
待たなくては <sup>ま</sup>いけないでしょ。だけど、<sup>じぶん</sup>自分の <sup>ねが</sup>願っている <sup>こと</sup>ことばかり  
<sup>かんが</sup>考えていたら、<sup>えいえん</sup>永遠に <sup>じかん</sup>時間がかかるように <sup>おも</sup>思えてきちゃうの。

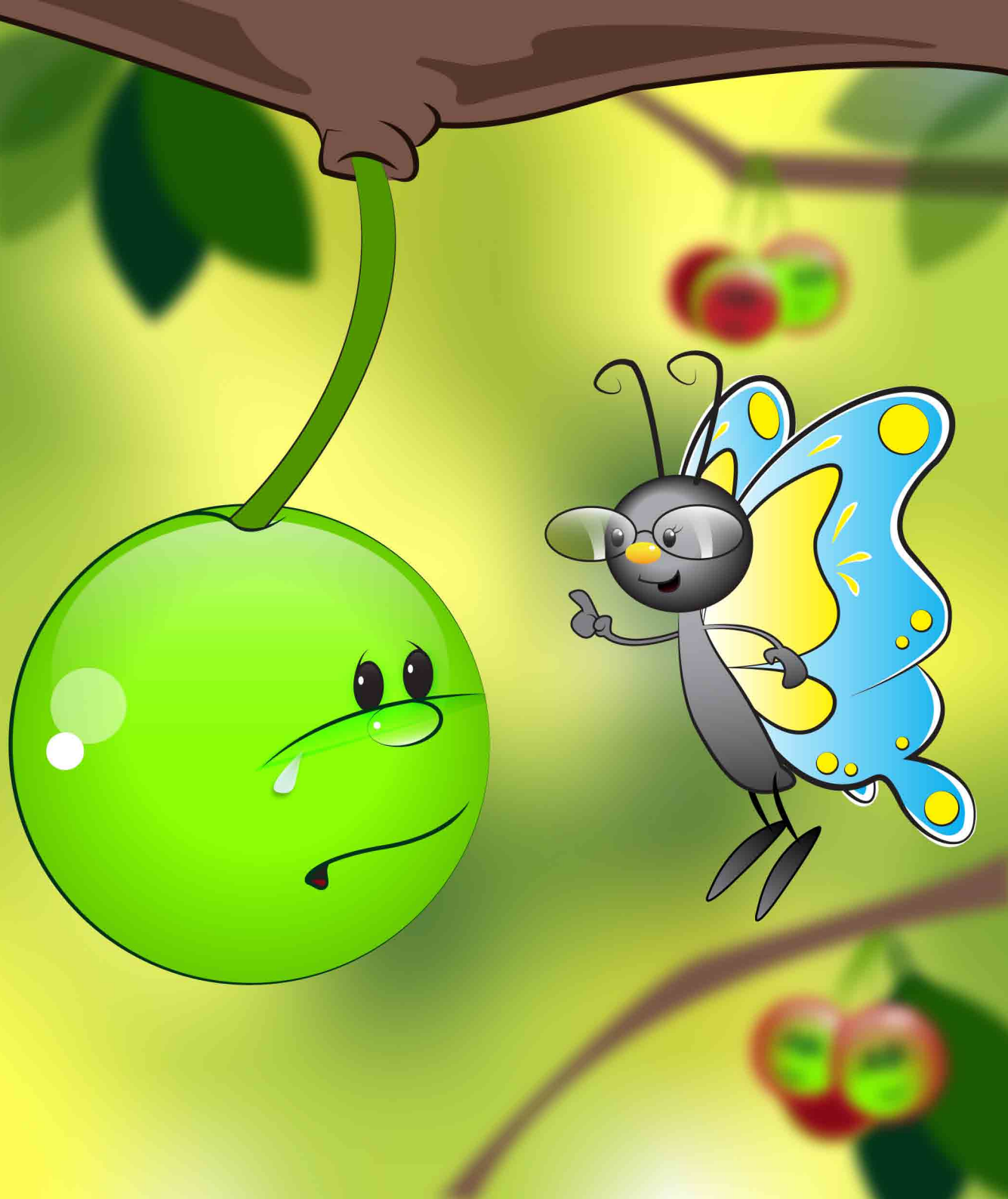




よいことを<sup>おし</sup>教えてあげましょうか。待<sup>ま</sup>って  
いる<sup>あいだ</sup>間、何<sup>なに</sup>かほかのことを<sup>かんが</sup>考えることよ。  
例<sup>たと</sup>えば今<sup>いま</sup>なら、ち<sup>みどりいろ</sup>っちゃな緑色のサクランボで  
いることを<sup>たの</sup>楽しんだらいいわ。そして、いつ  
自分<sup>じぶん</sup>がじゅくするかは、心<sup>しんぱい</sup>配しないことよ。  
風<sup>かぜ</sup>にふかれて、<sup>たの</sup>楽しくゆれていたらいいわ!  
友<sup>とも</sup>だちのサクランボや葉<sup>は</sup>っぱたちと、  
かくれんぼをしたりしてね。そうすれば、  
いつの間<sup>ま</sup>にか、自分<sup>じぶん</sup>がなるべきもの<sup>き</sup>にな  
ってることに<sup>き</sup>気づくわよ。」

「わかったよ。」とポウが言<sup>い</sup>いました。  
「何<sup>なん</sup>とかやってみるね!」

ちょうちょはさようならを<sup>い</sup>言うと、ひらひらと  
飛<sup>と</sup>んで行<sup>い</sup>きました。





何なんにち日か たったころ、ちょうちょは また サクランボの  
木きの そばを 通とおりがかりました。(友だちの ポウは  
どうしてるかしら?) と ちょうちょは 思おもいました。

初はじめて ポウに 会あった 時ときと 同じ 枝えだに ひらひらと  
飛とんで来て、ちょうちょが 見みたものは・・・  
ほっそりした じょうぶなくき。そして その先さきには・・・  
とっても 大おおきくて 丸まるくて 赤あかい、サクランボでした!

「まあ、すてき!」 思おもわず、ちょうちょは 喜よろこびの 声こえを  
あげました。「あなたは わたしが 見みたことのある 中なかで  
一いちばん番 大おおきくて 赤あかくて、最さいこう高こうに きれいな サクランボだわ!」

「そうなんだ!」 大おおきな サクランボ・スマイルで  
ポウが 言いいました。「君きみが ぼくを 元げんき気づけてくれて、  
本ほんとう当とうに うれしいよ。ぼくは 本ほんとう当とうに ちっちゃかったから、  
もう じゅくすことはないと思おもってたけど、しんぼう強つよく  
一いっしょう生せいけん命めい待まったんだ。そして、ちっちゃな 緑みどりいろ色の  
ぼくでいることを 楽たのしんでたよ。そしたら、  
いつの間まにか・・・赤あかくなってたんだ!」

ちょうちょは ほほえんで 言いいました。「そうなると  
わかってたわ!」